

# 空間と関わる身体表現      2020年度活動報告：場 を利用したアートワークとブレイクダンス

著者	辻 將成
雑誌名	名古屋学芸大学メディア造形学部研究紀要
巻	14
ページ	17-20
発行年	2021-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1095/00001577/">http://id.nii.ac.jp/1095/00001577/</a>

## 02

## 空間と関わる身体表現

## — 2020年度活動報告

場を利用したアートワークとブレイクダンス

“YAKUDOW” Body movement related to field.  
- Artist activity report for FY2020.

Place based Art works and Break dance.

デザイン学科・助手

Department of Design・Research Associate

辻 將成 Masanari TSUJI

## はじめに

現代アート作家 辻將成について、2020年度の制作・研究・発表の活動記録を報告する。コロナ禍の2020年で、発表の機会は少なくなかったが、ここで4つの活動について報告したい。

辻 將成は空間と身体、光をテーマに東海地区を中心に作品を制作しているアーティストで、彫刻・インスタレーション・写真・ペインティングなど、ジャンルにとらわれず様々な作品を生み出している。中学生の頃から独学で始め、10年以上続けて来たブレイクダンス(パリ五輪の正式種目にもなる事で注目を集めるブレイキン)の活動が生活の中に溶け込んでおり、プレイヤーとしてだけでなく、インストラクターとしても活動している。2018年より独自の感覚をヒントに自身にしか出来ない芸術への切り口を探求し始め、ダンスから身体というテーマを中心に置き、踊り・動き・時間・場所などのトピックが落とし込まれる作品を展開してきている。

ブレイクダンス独特の人間離れた動き、身体運動と躍動感を生かし、スピード感がありダイナミックなイメージを作品として表現している。踊りそのものが持つ躍動感・迫力、瞬間芸術とも言える要素は作品を作るための鍵と言える。

作家活動の中で、常々意識しているのは踊りの持つエネルギーや生命力といった感情と、踊り終わった後に残る儚き感情である。ダンスは生モノであり、映像では伝わらない魅力が常に存在すると考えている。それゆえに踊りを映像にしてストレートに残すことだけでは、ただ過去をみる記録になってしまうので、別の形の残し方で鑑賞者が身体を想像し、踊りの魅力を感じ取れるような表現を、プラスアルファとして残す事を意識して制作を始めた。

以上のことをベースとして、研究活動に取り組んでいる。ここで報告するプロジェクトは前年度まで行ってきた、写真を表現手法とした作品シリーズと、2020年から取り組んでいるダンボールを使ったパフォーマンスと記録の平面作品。そして他のアーティストとのコラボレーション作品の制作・活動である。

## 1 織部亭 35周年記念 グループ展

### 1.1 『わたしの一点 つながる 原風景』 2020

2月29日(土曜) - 3月22日(日曜)

愛知県一宮市 織部亭



写真1: 展覧会風景

### 1.2 展覧会

2018年より、お世話になっている現代アートギャラリー織部亭の、35周年を記念した企画グループ展に出展した。

私の参加させて頂いた第一期、オーナーの大島誠二さんがセレクトした東海地区を中心とした若手作家のグループ展に始まり、平面・立体様々な表現を持って、35年の歴史を彩った数多くのアーティストが二期・三期の時期に分かれグループ展を行った。

同世代の作家はもちろんの事、アート関係・デザイン関係・大学関係、様々な場面で活躍しているアーティストが空間を共有し、作品・研究について意見交換を行った。

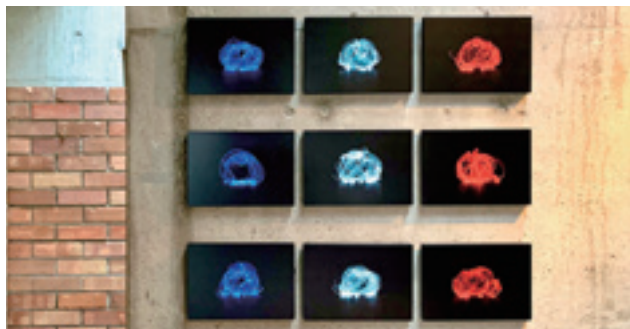


写真2: 発表作品

### 1.3 研究・制作・作品内容

2019年の作品で足にのみLEDの光源を取り付け、足の動きに焦点を当て、瞬間の躍動感を表現しているブレイクダンスを可視化させるという事を行い作品を作った。この織部亭の展覧会に向けて行った制作は、地面との設置する線を意識した作品からは異なる、円運動に意識をおいた作品のシリーズである。連続する同じ動きからなる踊りだが、一つ一つが異なる要素を持っている。【写真2】

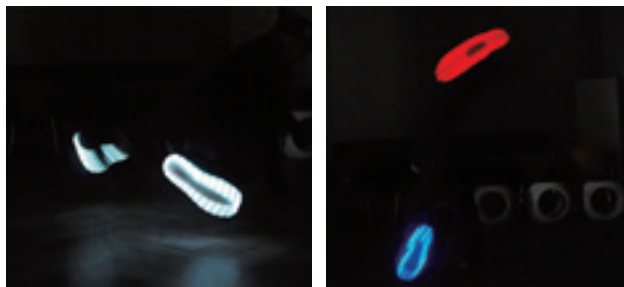


写真3: 実験制作・撮影時

私はパフォーマンスを行う中で、人体の構造とブレイクダンスの動きが多く回転・円運動を起こしていることを考えている。身体を捻り、体重を持ち上げたり、止まる瞬間の関節や筋肉の捻りや、遠心力を使い重力に反発する動きなどである。多くの動きの基礎に円形の動きが用いられており、ブレイクダンスと言えば「回る」という考えが一般に浸透している事もわかる。これらは一定のリズムと連続性を持ち観客に対して披露され、あたかも同じ動きを連続させているように見えるが、私が注目したのは同じ動きをベースとしているが、違い(不揃いな良さ)があるという事である。

【写真2】の発表作品は一回一回を同じ動きを同じ回数で行ったものだが身体の可動域や運動のリズムを少しずつ変えている。実際に行うパフォーマンスではその違いは分かりづらいが、写真の作品として実際の動きの正確な足の軌道が表現されると一つ一つが違いを表していることがわかる。即興性もブレイクダンスにおいて大きな要素であることから、その不揃いさは魅力的なものであると考え連続する作品とした。

## 2 SUNSHINE JAM Group exhibition

### 2.1 ダンサーに向けた作品展示

3月21日(土曜)

PINEBROOKLYN 大阪



写真4: 発表作品

## 2.2 展覧会

ここでの発表目的は作品発表の場とその効果について、考えたいという趣旨である。展覧会のターゲットは全員ストリートダンサーであり、ダンスの大会の中で実施されたグループ展で、私を含め現役のダンサーかストリートカルチャーに精通し、モノ作りを行っているクリエイターによる展覧会であった。

鑑賞者のほとんどが私と同じ目線でダンスと向き合っているという事から、その場で身体を動かしたり、ダンスに対して共通意識も多く、普段の展覧会とは違った形で、ダンサー独特の感想を得ることが出来た。基本的に動きとして意識し見ているダンスを平面作品にし、時間の記録として可視化している私の作品は、踊りへの新たな考え方や好奇心を共有するツールにもなり、作品を通したダンサーとのディスカッションには多くの学びがあった。

## 3 アーティストコラボレーション

### 3.1 THE CIRCLE HAS MOVED

Video art collaboration / Izaak Brandt

6月21日(日曜) - 現在

Online

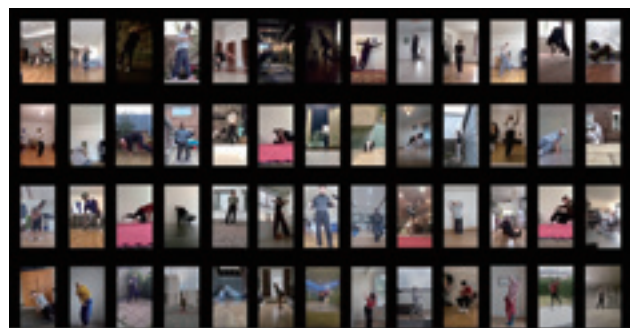


写真5:発表作品 Online

### 3.2 制作にあたり・作品意図

イギリス留学時の友人でもあり、同世代の芸術家でダンサーでもあるIzaak Brandt のVideo Art プロジェクトに参加した。コロナ禍であることから、Videoを通してオンラインでダンスを使った作品を制作した。

ダンスという共通の言語を用いて、多国籍様々なジャンルのダンサーで同じ時間の長さ、同一の条件をつけて、ビデオパフォーマンスの映像を撮り、共有した。その記録である。本来であれば同じ空間を囲み、踊りを共有し合う事が理想であったが、全世界がCovid-19の影響を受けイベントやパフォーマンスの機会など、多くを失ったことから立ち上った

たプロジェクトであり、2020年という一時の世界情勢を語るものになった。

## 4 路上、路常、路情。展

### 4.1 ストリートを軸にした五人展

岐阜県 岐阜市 柳ヶ瀬商店街

サロン ド マルイチ, ギャラリースペース

11月7日(土曜) - 11月29日(日曜)

### 4.2 プロジェクト内容

東海、関東地区を中心に活動する5人のクリエイターの展覧会を企画・運営、そして作家として参加した。メンバーの一人と、会場となったサロン ド マルイチ オーナーとの繋がりがあり、立ち上がった展覧会企画。

『ストリート』という共通のカルチャーを意識し、『路上』という場所・街を読み解く事を考え、街の景色・日常・感情をテーマとした制作を提案した。



写真6:展覧会 DM Design 協力: Kohei Inomata



写真7:サロン・ド マルイチ, 展覧会看板 看板制作 協力: デザイン学科 助手  
写真撮影 協力: 堺省吾

### 4.3 実地調査

6月中旬から展覧会メンバーと共に、会場となるサロン ド マルイチ とその周辺、柳ヶ瀬商店街の撮影スポットを探すための調査を行った。各々の目線で商店街を見て気付きを見つけていくフィールドワークと、それを元にしたオンライン会議を週1回のペースで行った。街を空間的に見る者、人と関わろうとする者、街を抽象的に捉える者、各々のモノ作りへの価値観を感じる取り組みであった。



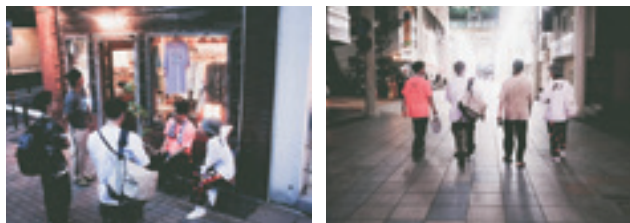


写真8: 柳ヶ瀬商店街 実地調査 6月  
写真撮影 協力: 堺省吾

#### 4.4 制作にあたり・作品意図

私は大きく二つの作品展開を行った。ここで今年の大きなテーマでもあった、空間・場所と関わる身体表現をまず、2018年よりロンドン、名古屋で実施した街中で踊るプロジェクトを、柳ヶ瀬でも実施した。

踊りから生まれる動きの連続性を、ライトとカメラ（一定時間の長時間露光 撮影機能）を使い、写真の中に動きの痕跡としてヴィジュアル化する作品である。そこに場所と関わるという空間に対するアプローチを意識し、より動きのパフォーマンスの中で物体やその場の状況を意識し表現した。被写体である私をどこからみるのか、どの場所を作品として切り取るのか。

ただ踊った光の痕跡を残すだけで無く、新たな作品要素を加えた。場所は柳ヶ瀬にある、柳ヶ瀬倉庫というビルの屋上と螺旋階段を利用しパフォーマンスを行い撮影した。



写真9: 柳ヶ瀬商店街 実地調査・作品撮影・パフォーマンス 9月  
写真撮影 協力: 堺省吾

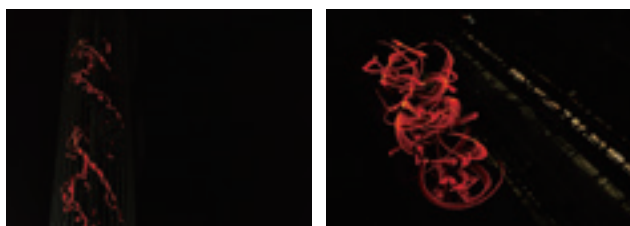


写真10: 柳ヶ瀬商店街 実地調査・作品撮影・パフォーマンス 10月  
写真撮影 協力: Misaki Hoshino

そして、2020年より開始したダンボールシリーズ。プレイクダンスとダンボールを使用した、フロア（踊るスペース）を作る行為は以前から実施しており、ダンボールは路上で簡易的に踊るのに適したマテリアルであることから、ダンボールを使用し、フロア（踊れる床面）を街の中に持ち出し、パフォーマンスを行った。

ダンサーの人体と地面のテクスチャーでダンボールに運動の力が加わり、その痕跡と時間を記録した平面作品を制作した。



写真11: 柳ヶ瀬商店街 実地調査・作品撮影・パフォーマンス 10月

#### 4.5 展覧会

Covid-19流行の影響により、ウイルス対策を行って開かれた路上展、約1ヶ月間続いた展覧会は、岐阜にお住まいの方はもちろん、他府県からも多くの方にご来場いただいた。

柳ヶ瀬が大きなテーマになっていることから、柳ヶ瀬を知っている方、中でも地元の方の声が印象的で、「改めて柳ヶ瀬・岐阜が魅力的に感じた」という言葉をかけてくださる方もいた。我々の目線で表現した作品、アートワークやダンスの持つ可能性や、思いや感覚を表現し、アウトプットすることの重要性を改めて感じるものとなった。



写真12: アーティストトーク 展覧会会場 最終日  
写真撮影 協力: 堺省吾

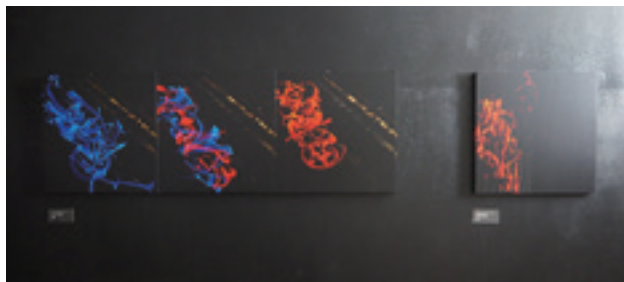


写真13: 作品写真 展覧会会場

#### 5 おわりに

2020年はCovid-19の影響があり、多くの活動を延期・中止になってしまったが、現実には起こっている状況に向き合い新たな感覚や、取り組みに迎えた一年でもあった。アーティストとしてこの一時代を生きている事を自覚し、未来への糧にしたいと考えている。次年度は今年の経験や活動を生かし、アートワークやダンスに対して自身の軸を持ちつつ、常に新しい表現や感覚を追い求め研究に励みたい。